

学位請求論文審査結果の要旨

報告番号 甲 第 号

氏名 郭 笑蕾

論文題名 グローバル時代における国際結婚と社会統合に関する社会学的考察
—日本における都市部の中国人国際結婚女性を事例に—

審査担当者

主査 慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員

博士（社会学）

塩原 良和

副査 慶應義塾大学法学部教授・大学院社会学研究科委員

修士（社会学）

竹ノ下 弘久

副査 東洋大学社会学部准教授

博士（学術）

ゴロウイナ・クセーニヤ

1. 本論文の概要

本論文は、日本の都市部に暮らす日本人男性と結婚した中国人女性に対するインタビュー調査によって得られたデータに基づき、女性たちの国際移動や国際結婚の要因と日本社会への統合過程を多角的な視点から明らかにしたものである。

国際結婚して日本に移住した外国人女性に関する先行研究には、地方農村部におけるいわゆる「外国人花嫁」を対象とするものが比較的多い。しかし昨今では、日本人男性と結婚し、日本の都市部で暮らす外国人女性も増加している。一方、「インターマリッジ」に関する欧米の先行研究には、量的調査の手法を用いたものが多い。しかし国際結婚移住女性の経験の分析のためには、当事者の主観的経験や意味世界にアプローチできる質的研究法が有効な場合がある。そこで本論文では、国内外の先行研究の批判的検討を踏まえた分析枠組みを設定し、中国人国際結婚移住女性の国際移動・国際結婚の経験、結婚後のキャリア形成、日本への定住志向の形成や変化といった論点が、インタビュー調査によって検討される。そこから、彼女たちの経験の多様性、日本社会で直面する制約とそれを乗り越えるために彼女たちが活用しうる諸資源の多様性、そして中国人国際結婚移住女性の国際移動と社会統合における主体性のあり方といった知見が示される。そのような知見を踏まえ、本論文は、日中国際結婚移住女性の新たなイメージを描くことを試みている。

2. 本論文の構成と各章の要旨

本論文の構成は以下の通りである。目次・本文 A4 版 164 ページ、引用文献リストや巻末資料等を含めて 187 ページと、博士論文として十分な分量である。本文は 7 つの章から構成され、第四～第六章が調査結果の紹介・考察である。

第一章 問題意識

- 1.1 国際移民の動向
- 1.2 日本における国際結婚
- 1.3 本研究の目的
- 1.4 本研究の構成

第二章 国際結婚に関する先行研究の検討

- 2.1 国際結婚の発生とその要因
- 2.2 国際結婚移住女性の受け入れ社会への統合
- 2.3 先行研究の批判的再検討

第三章 本研究の分析枠組みと調査概要

- 3.1 分析枠組み
- 3.2 調査概要

第四章 国際結婚移住女性の移動経験と配偶者選択

- 4.1 国際結婚女性が経験した国際移動のパターン
- 4.2 国際結婚に影響を与える要因
- 4.3 まとめ

第五章 国際結婚移住女性の労働市場への統合 ―キャリア形成を中心に―

- 5.1 事例から見る国際結婚移住女性のキャリア形成
- 5.2 国際結婚移住女性のキャリア形成への影響要因
- 5.3 起業・自営業：キャリア形成の新たな可能性
- 5.4 まとめ

第六章 日中国際結婚移住女性の定住に関する考察

- 6.1 定住のフレキシビリティ
- 6.2 定住をためらわせる要因
- 6.3 日本での定住を促進する要因
- 6.4 まとめ

第七章 結論

- 7.1 本研究の要約
- 7.2 本研究から得られた示唆
- 7.3 本研究の限界と今後の課題

引用・参考文献

添付資料

謝辞

以下、各章の内容を紹介する。

第一章では、本論文の問題意識と目的が示される。グローバル化が進む現代世界において、従来から移民を受け入れてきた欧米諸国だけではなく、アジア諸国も多くの移民を受け入れている。そのなかで日本と中国は、アジアにおける主要な移民受入・送出国になっている。また先進諸国において、女性の労働市場への進出に伴い、家事労働・育児・高齢者への介護といった再生産労働の領域への女性移民の進出という状況が生まれている。この国際移民の女性化は、国際結婚を通じて移住する女性によっても担われている。

日本においては、1990年代にアジア人女性と日本人男性の国際結婚が増加した。当時は、日本の地方農村部における男性の結婚難を背景に、仲介機関が介在した例が多かった。その結果、日本人男性と結婚した外国人女性の数は、日本人女性と結婚した外国人男性の数よりもはるかに多いことが、日本における国際結婚の特徴の一つである。こうした事情から、日本の国際結婚移住者の先行研究は農村部の外国人女性を対象にしたものに偏重する傾向が見られる。そこで本論文では、近年増加してきた、仲介機関を介さず結婚し都市部に居住する中国人女性を調査対象として、1. で述べたような問題意識と目的に基づいてインタビュー調査を実施し、得られたデータを分析する。

第二章では、日本の国際結婚に関する先行研究が検討される。国際移住と国際結婚の発生の要因として、経済的要因、ジェンダー的要因、国際的な移住ネットワークや移住システム、グローバル・ハイパーガミー、ライフスタイル移住、地域間のつながりといったさまざまな歴史的・文化的要因が関係している。そのうえで本論文では、国際結婚移住女性の受け入れ社会での就労による労働市場への統合、そして受け入れ社会での定着と定住志向のあり方という、ふたつの社会統合の局面に注目する。移民の就労に影響を与える要因として、先行研究では社会関係資本と人的資本の役割が指摘されてきた。しかし、インターマリッジが移民の社会経済的地位に及ぼす影響については明確な結論は得られていない。そのうえ日本における国際結婚移住女性に関しては、家庭内の再生産労働に注目する研究が多く、家庭外での労働市場への参加に関する研究は少ない。

また、従来の日本の研究は、農村・地方部における「外国人花嫁」の事例に集中し、彼女たちを「弱者」すなわち構造的な犠牲者として表象する傾向があった。そのような傾向を批判し、女性たちの主体性を強調する研究も存在するが、そこで強調されたのはあくまで、受け入れ社会における社会規範や社会構造、家族規範や家族構造の下での限定的な主体性であり、また、女性たちが送り出し社会とのあいだで取り結ぶトランスナショナルな関係性は見落とされている。一方、日本における研究は、国際結婚移住女性が日本社会に永住することを暗黙の前提にしがちであり、トランスナショナルな移住形態の多様性という視座が不足している。

第三章では、第二章での先行研究の整理をもとに、本論文の分析枠組みが提示される。それは第一に、トランスナショナリズムという視座である。国際移民は出身国における家族や友人などとコミュニケーションや経済的関係といったつながりを保持する。またグローバル化が進展し、人々の移動が活発化しているなかで、移住女性の移動の理由も多様化している。本論文では国際結婚をめぐるトランスナショナルな移動のあり方を、多角的な視点から考察していく。第二に、国際結婚と社会階層との関連性への視座である。前章で検討したように、日本における国際結婚移住女性の研究は、低階層の女性を対象とする質的研究に偏重している。その点を踏まえ、女性の国際結婚と社会階層との関連をさらに検討していく。第三に、ライフコースにおける主体性という視座である。すなわち、国際結婚移住女性のライフコースの形成に影響する諸要因の分析と、その要因のひとつとしての彼女たちの主体性への注目である。本論文における主体性とは、個人がそれまでの経験や努力によって得られた能力を利用し、自らの人生軌道をデザインする能力を意味する。

以上のような分析枠組みに基づき、第四章から第六章では中国から日本に国際結婚で移住してきた30名の女性の語りを題材として、彼女たちが経験する国際移動、国際結婚、キャリア形成を通じた社会経済的統合、定住の選択といった過程を考察した。

第四章では、国際結婚の発生に影響を与える諸要因が考察された。中国の経済発展等によって生じた海外留学ブームを背景に、国際結婚する前に留学や就職といった形で中国から日本への移動を既に経験している調査協力者が多かった。また中国における伝統的なジェンダー規範からの逃避、中国でのキャリアの展開の難しさも移動の理由となっていた。一方、仕事や中国文化への親近感などの理由で、日本人男性が結婚する前に中国を訪れ、そこで調査協力者と出会った事例も多くみられた。それゆえトランスナショナルな移動が、中国人女性と日本人男性との出会いの場の増加・多様化をもたらしていることが示唆された。なお結婚前に国際移動を経験した調査協力者の大半は、都市部の中間層家庭の出身であり、海外への留学や就職への親からの経済的・情緒的な支援を受けることが可能であった。

本章で分析した国際結婚の大半は、夫婦の教育レベルが近く、よく似た価値観、ライフスタイルを持っている事例であった。それゆえそれは先行研究が示唆するグローバル・ハイパーガミーではない、学歴・階層同類婚としての国際結婚である。とりわけ、もともと相手の出身国の言語や文化に関心をもっていた者どうしが結婚する事例が多かったのが特徴的であった。また国際結婚が自分の将来の可能性を広げるもの、未知性への挑戦に満ちた人生への可能性であるとする女性たちもいた。こうした国際結婚移住女性の主体性が、彼女たちが自らのライフコースを形成してゆく原動力となっている。

第五章では、日本に住む中国人国際結婚移住女性のキャリア形成に影響を与える諸要因と、新たに開拓されるキャリアの可能性が考察された。彼女たちのもつ社会関係資本と人的資本のあり方が、来日当初のキャリア選択、とりわけ就労のあり方に大きな影響を与えていた。あらかじめ日本人とのネットワークがなく日本語が流暢に話せない女性の場合、情報が入手しにくく、日本での就労が難しくなる。逆に日本への留学を経てから就職する場合、日本人とのネットワークがあり日本語が十分に話せるため、正社員として就労する可能性が

高くなる。すなわち、両親の経済的支援を受けて留学した中間層出身女性が、日本人とのネットワークを社会関係資本として活用することにより、日本の労働市場へのスムーズな参入を果たす傾向が見られた。

また調査協力者の出身階層の違いは、来日時就職に対する意欲にも影響していた。都市部出身の調査協力者は、留学を通じて来日し、自分のライフスタイルを追求するため、高い就業意欲を持っていた。しかし農村部出身の調査協力者は、結婚自体を目的として来日する傾向があり、就業意欲は比較的低かった。しかしいずれの場合も、いったん就業しても結婚・出産によりキャリアが中断されることも多かった。都市部出身の女性でも、日本社会で根強い専業主婦規範を内面化した結果、キャリアを中断するか、非正規雇用等に転職するといった形でキャリアの下方移動を経験する事例も見られた。ただし、中国の両親をトランスナショナルな社会関係資本として活用し、育児への支援を得ることが可能である場合は、キャリアの継続が可能になっている。

国際結婚移住女性のキャリア形成はライフコースの進展とともに変容する。日本での生活年数の増加につれ、彼女たちは社会関係資本を発展させ、人的資本を蓄積していく。その過程で彼女たちは主体性を発揮し、新たなビジネスの可能性を開拓する。その典型は、中国における人的ネットワークに支えられた代購ビジネスである。このように、中国の親からの育児支援や、中国人とのネットワークによって開拓された新たなキャリアの形式が、調査協力者の日本の労働市場への統合に大きな影響を与えている。

第六章では、国際結婚移住女性の定住に関する意識とその決定に影響を与える要因が分析された。調査時点ですべての調査協力者は日本に居住していたが、将来の居住地については確定しておらず、フレキシブルな居住のあり方への志向性が見られた。一方で、日本への永住を決めたり、逆に中国への帰国を決めた事例もあった。

調査協力者のなかには、日本の労働市場における困難や、日本人とのネットワークの弱さ、中国の両親との関係といった問題に直面し、日本に定住していくことに不安を感じている者もいた。その不安を解消するため、彼女たちは中国人とのネットワークの構築、自身が置かれた状況を肯定するために他者を準拠点として比較すること、宗教への帰依など、さまざまな戦略をとっている。さらに本章での分析による重要な知見は、中国人国際結婚女性は日本に居住していても日中間のトランスナショナルなつながりを保っており、それが彼女たちの将来におけるトランスナショナルな移動の可能性を高めていることである。そのトランスナショナルなつながりには、経済的な面と制度的な面がある。彼女たちの日本への社会統合は日本で定住することのみによってではなく、中国とのつながりを保ちながら、もしくは積極的に構築しながら進行しているのである。このようなトランスナショナルな生活の遂行には、社会関係資本、人的資本、または移動の経験から形成された価値規範が作用している。これは特に、都市部出身の調査協力者に顕著に見られる特徴である。

国際結婚移住女性の定住意識は、ライフコースによっても規定されている。子育ての時期では「妻」、「母」といった役割規範に強く影響され、日本に定住する意識が強くなるが、年齢を重ねると、ライフスタイルの追求や中国の親の介護を行うために、トランスナショナル

な生活を送る傾向がある。さらに高齢になれば、自らのルーツである中国に戻る可能性も語られた。ただしそこにも女性が持つ社会関係資本と人的資本による違いがあり、こうしたトランスナショナルな生活を想定可能にしているのは、加齢とともに蓄積されてきたこれらの資本である。一方、こうした資本をそれほど多く保有していない国際結婚移住女性は、日本への定住志向が比較的強かった。そうした女性は、日本の労働市場への統合が比較的弱いが、国際結婚によって得た「妻役割」、「母親役割」を強く内面化し、日本での家庭を守るために定住しようとする傾向が見られる。

第七章では、これまでの章での分析結果がまとめられ、本論文の結論が提示される。

第一に、本論文における日中国際結婚移住女性の分析からは、トランスナショナリズムが国際結婚移住女性の定住と社会統合に与える影響が示唆された。具体的には、中国の親による育児支援が職業キャリアの継続を左右することや、中国におけるネットワークにより、日本における新たなビジネスの機会が開拓される可能性が示唆された。さらに日本に住む中国人国際結婚女性が日中間のトランスナショナルなつながりを保つことで、将来のトランスナショナルな移動の可能性を高めることも示された。

第二に、国際結婚と階層の関連性という観点からは、移動のあり方の多様化と配偶者との出会いの場の拡大によって出現した、異言語・異文化への親近感を前提とした配偶者選択が、ハイパーガミーではない学歴・階層的同類婚を多く発生させうることが、本論文での検討から明らかになった。ただし、そうした傾向は依然として、比較的高い階層出身者に出現するという意味で、階層によって規定されたものでもある。また出身階層が高い女性のほうが、来日当初の就業意欲が高く、その後も就業を通じて労働市場に円滑に参入する傾向にあった。一方、定住志向に関しては、比較的社会関係資本、人的資本を保有していない女性のほうが、「妻」「母」といった役割規範を通じて日本へのより高い定住志向を示していた。

第三に、国際結婚移住女性のキャリア形成と定住意識がライフコースの進展とともに変容するということが示された。日本社会での生活年数の増加につれ、国際結婚移住女性は社会関係資本と人的資本を蓄積していく。しかしそれは、彼女たちの出身の階層構造に制約されてもいる。また子育て期やその後のライフステージの変化によって、定住に関する意識は変化していた。

本論文では、日中国際結婚移住女性の社会統合の過程における主体性のあり方が示された。女性として日本の職場で困難に直面している調査協力者は、トランスナショナルなネットワークを利用することで、新たなキャリアの可能性を見出していた。また将来日本に定住していくことについて不安やためらいを解消するために、彼女たちは様々な戦略を取っていた。そうした主体性のあり方は出身階層によって規定されてはいるものの、彼女たちは日本社会に統合されながらもトランスナショナルな社会関係資本を活用しつつ、自分たちのライフコースを切り拓いていくのである。

3. 本論文の評価

本論文は、日本における移民の国際結婚と社会統合との関係について検討する非常に意

欲的な研究である。日本の都市部に住む 30 名の中国人国際結婚女性にインタビュー調査を行い、彼女たちの国際結婚の様相や、労働状況・定住意識などから見た社会統合のメカニズムを社会的に考察している。分析のレンズとしてトランスナショナリズム、階層、主体性、ライフコースといった視点を採用している。本論文の意義や評価できるポイントを以下にまとめる。

第一に、日本と諸外国の国際結婚と社会統合に関する先行研究を非常に幅広く概観し、その上で、先行研究の問題点や研究が不足する点を説得的に提示し、本研究の研究課題を設定している。日中英の 3 カ国語で書かれた先行研究が整理され、幅広い領域をカバーしている。そのため、本論文が先行研究に比してどのような貢献を成しているのかが明示されており、とても説得的である。

第二に、第一の点とも関連するが、日本における国際結婚の先行研究は、比較的低学歴、低階層の日本人男性と結婚した外国人女性に注目する傾向が強いため、日本社会における国際結婚の多様な姿を十分に捉えることができなかった。本論文はとりわけ高学歴の移民女性に注目することで、学歴同類婚としての国際結婚をした移民女性の特徴を明らかにすることに成功している。従来の国際結婚研究がグローバル・ハイパーガミーという枠組みの下で論じられることが多い中、本論文は同類婚の存在を明らかにしたと同時に、それを裏付けるトランスナショナルな移動や階層、居住地という要因を分析している。従来の研究が見過ごしてきた対象に注目することで、先行研究とは異なる国際結婚の特徴にアプローチすることが可能となっている。

第三に、労働市場への統合という観点から調査協力者の事例を分析した章では、キャリア形成やそれに伴う意識の変化、就労形態を取り上げ、女性が日々直面せざるを得ない構造的な多くの問題を明らかにすることに成功している。また、本論文の極めて独創的な点であるが、女性たちが行う代購や We 商といった起業活動を綿密に描写し、メインストリームの市場に参入できなくても一所懸命に働き、稼ぐ女性たちの力強い姿を浮き彫りにしている。そして、こうした女性たちの活動が、国際家族のライフプランの中に組み込まれていることも明らかにされた。また、日本や中国において育児・介護問題の政策が十分ではないことが、当事者の就労を阻害していることも示されている。

第四に、調査協力者の定住意識に関する考察では、トランスナショナリズムやライフコースという視点を追加することで、国際結婚がさらなる「移動」の可能性をはらんでおり、「定住」を当事者の絶対的な目標として捉えることができないという新たな見方が明示されている。

第五に、国際結婚女性の社会統合に関わるこれらの分析において、これまでの欧米の先行研究を丹念に検討した上で、様々な観点から社会統合とそれに関わる要因を明らかにすることができている。日本の国際結婚の先行研究の大きな特徴として、理論志向が弱く、記述的な傾向が非常に強かった。しかし本論文は、海外の移民研究で用いられている理論枠組みを丹念に検討して分析枠組みを構築しており、質的データを用いて議論を展開するに際しても理論的な考察を重視しているため、考察内容がとても説得的である。

また本論文の主要な研究対象ではないものの、中国人国際結婚移住女性の日本人配偶者や日本側の家族の描写や考察も評価できる。政策としての多文化共生が議論されているなかで、一般の日本の人々が中国語を学び、中国やその他の海外に行き、中国人を家族のメンバーとして受け入れ、互いに学び合う、つまり多文化に根付いた生き方を日々実践している姿が、そこに示されているからである。今後は研究対象を広め、本論文によって示唆されたこのような実態を引き続き検討することが期待される。

以上の点から、本論文は博士学位に相応しい内容となっている。とはいえ、あらゆる研究は、研究の焦点が明確であるほど、その限界も明らかである。研究の今後のさらなる展開を期待するとき、以下の点が指摘できるかもしれない。

第一に、欧米におけるインターマリッジに関する先行研究は統計データにもとづくものが多く、質的データにもとづく研究が不足しているという指摘は、確かにその通りである。しかし、日本における国際結婚に関する先行研究では質的データにもとづく分析が大半を占め、統計データにもとづく体系的な考察が非常に不足している。今後は、本論文が分析対象とした高学歴の同類婚の国際結婚のカップルが、日本社会や他のアジア社会における国際結婚の中で、どの程度の規模を示すものなのかについて、体系的な検討を行ってもいい。量的調査と質的調査の両方を用いた *mixed methods* という調査手法は、国際的にも近年、注目されている。*mixed methods* にもとづく、本調査事例の量的な位置づけと考察のさらなる進展を期待したい。

第二に、高学歴者の同類婚の国際結婚カップルの増加は、おそらく、日本社会にとどまらず他の社会でもみられる現象である。国際結婚やインターマリッジは、移民受け入れ国と位置づけられるアジア社会でも近年多く認められるが、国際的な比較研究は非常に不足している。高学歴同類婚の国際結婚は、アジアにおける高等教育の拡大と海外留学の発展と密接に結びついた現象である。その意味では、教育を経路とした国際移民の進展という観点からも、検討が必要な現象である。アジアにおける高等教育の拡大と海外留学の進展は、こうした高学歴同類婚の国際結婚カップルを増加させることが予想される。グローバル化と高等教育の拡大という観点から、国際比較研究を実施し、検討を行うことで、移民研究に対してさらなる貢献が期待できる。その際、他国における都市部の国際結婚女性との比較や、中国語によるインタビューの語りの分析を充実させて社会言語学的文脈化を行うことにより、本データの更なる適用が期待できる。

なお、本論文は日本語を母語としない留学生である郭君によって書かれている。文中には誤字や表記の乱れも一部にみられる。しかし、それは本論文の価値を損なうほどではなく、入念なネイティブチェックを受けたこともあり、日本語で書かれた博士論文として及第点であると評価できる。

2021年6月15日にオンラインで実施された博士論文公開審査において、郭君は本論文の内容を的確に整理したスライドを準備し、流暢な日本語で研究報告を行った。審査者を含む16名の聴衆との日本語での質疑応答にも、的確に回答していた。それにより、日本を研究対象として日本語で研究活動を実施するために必要な日本語運用能力を郭君が備えてい

ることが示された。

4. 結論

以上のように、本論文は中国人国際結婚移住女性の国際移動や国際結婚の経路、就労の実態や定住への志向などを通じた社会統合のあり方を論じ、主体性を発揮するものとしての移住女性のあり様を十二分に明らかにし、国際結婚のトランスナショナルな性質をめぐる多角的でかつ新たな視点を提示したものとして、高く評価できる。本論文は、在日中国人国際結婚移住女性の日常実践や、そこから伺える人生設計に関するビジョンを明らかにすることによって、多くの要因によって影響を受けながらも自らの人生の主體的なアクターであり続けようとする移住女性の姿を描き出すことに成功している。上述のような課題も指摘したが、それらは郭君が研究者としてキャリアを発展させていくなかで取り組むべき新たなイシューなのであり、本論文によって示された郭君の力量をもってすれば、近い将来に必ず達成することができるであろう。諸般の事情により、本研究科社会学専攻博士課程の標準的な大学院生よりも短期間で博士論文を完成させることに挑戦し、それを見事に成し遂げた郭君の努力を讃えたい。

それゆえ査読者一同は、郭笑蕾君が提出した本論文が、博士（社会学 慶應義塾大学）の学位を授与されるのにふさわしいと評価し、ここに報告する次第である。

以上